



# 東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

## Sowing the Seeds of TOK : Transfer of Learning through Contextualized Teaching

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-04-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山根,正博, 水津,竜也, 内野,浩子, 嶽,里永子, Ben,Smith, 小林,万純, 小松,万姫 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/00173820">http://hdl.handle.net/2309/00173820</a>

## TOKの種をまく

— 文脈化された指導による学びの転移 —

### Sowing the Seeds of TOK

— Transfer of Learning through Contextualized Teaching —

研究グループ DP

DP 日本語 A 山根 正博

DP 歴史・DP TOK 知の理論 水津 竜也

DP 数学 内野 浩子

DP Visual arts 嶽 里永子

DP English A Ben Smith

DP English B 小林 万純 小松 万姫

#### 1. はじめに

当研究グループはIBの高校課程ディプロマプログラム(DP)の教科担当者からなるグループである。今回の全体研究テーマ「学びの転移」をIBの6つの教育原理のひとつである文脈化された指導に焦点を当てた。

IBの手引きではDPを支える教育原理のひとつとして地域的な文脈とグローバルな文脈において展開される指導を挙げ、次の言葉を引用している。

「学習は、それが生徒の周りの世界と関連づけられるとき、最も意義深く、持続的なものになる。」(Walker 2010)

つまり学びの転移がおこることで学習がより意味のあるものになるのである。今回当グループではTOKに関連した各教科の実践に焦点を当てた。教科の実践を別の文脈(状況)、TOKの視点からとらえなおすことで学びの転移のプロセスを明らかにしたい。

#### 2. TOKの視点

知の理論(Theory of Knowledge, 以下 TOK)とはDPにおける必修科目である。TOKでは「どのように知ることか(“How do we know?”)」という問いを中心命題に掲げて、ディスカッションやプレゼンテーションをしながら探究する。各教科の実践のなかでもこの「どのように知ることか」という命題について考える機会が組み込まれることが求められている。これをTOKリンクと呼ぶ。本研究会ではDPにおいて学びの転移のキーとなるのがTOKではないかと考えている。TOKリンクは全体の文脈や知識の体系を意識できる仕掛けの一つである。MYPにおいて科目の有機的なつながりは各教科で共通に取り入れる概念や、教科間連携の実践などで意識できる仕組みがある。DPにおいてTOKがその教科間のつながりを意識する役割を担っている。知識の作り方、扱い方の学問分野(教科)の特徴を意識することは、教科間のつながりについて考える機会になる。TOKリンクをいかに教科の実践に組み込むか、というのは本校で

も大きなテーマである。2018年度のDP担当者による研究では約半年かけて各教科のTOKリンクを紹介しあうなど教科を超えた共通理解を促す実践を行ってきた。また今年度は当研究グループ間で授業を見学しあった。

今回はこうした各教科のTOKリンクまたはその前段階の実践の一部をオムニパス形式で見ただくことで、本校のTOKに関連した各教科の実践の一端を垣間見てもらえたらと思っている。授業研究会では日々の授業実践を見ていただいた。各教科の日々の実践の中で行っている学習の転移の仕掛けをここでは「種まき」と名付けた。実践によって教科の学びを意識化し、学びの転移を起こす試みを行った。

### 3. 単元設計・概要

#### 日本語 A (文学)

DP 日本語 A (文学) では、6年次に最終評価に向けて、個人口述 (内部評価)、HL Essay、Paper1 (外部評価) が課される。本来は Paper2 も課されるのだが、COVID-19 の影響で、今年度は課されていない。日本の大学入試では試験当日隣に座った受験生は言うまでもなく、普段の教室で隣に座っている同級生さえライバルとなりかねない。どちらがより多く点を取るか、ライバルより一点でも多く取ることには心血が注がれるが、DP の評価の場合、もちろん点数はつくのだが、隣の誰かと点数の上下を巡って競争するという意識は非常に弱い。隣の誰かの上になるかということより、自分自身がいかにベストのスコアを出せるかという方向に意識が向きやすく、その分最終試験の直前であっても、ともに学び高め合うという、協働という形はとりやすい。

授業についての動画では、Paper1 の練習のためにグループで話し合いお互いの考えを共有しようとする様子を提示した。また、DP 日本語 A (文学) の内容から離れるが、最終試験を終え、一段落ついたところで、他の教科との間での学びの転移などについて、5 学年 4 月から振り返ってアンケートを行った。授業研究会当日はその結果の提示により多くの時間を割いた。その概要については、4. 生徒の捉えた「学びの転移」で提示する。

#### 歴史

DP 歴史は、山本勝治教諭と私でチームティーチングを行っている。

DP 歴史の最終試験 (Paper 1~3、外部評価) は、Paper 1 の一部を除き、設定された問いに文章で答えるエッセイライティングである。また、内部評価 (Internal assessment) は歴史研究 (Historical investigation) となっており、生徒自身がテーマを設定して問いを立て、資料を分析しながらそれについて論じていくことになる。いずれも問いを立てて多角的に議論することは共通している。

授業における学習活動は、このような問いに答えるために必要な事項を生徒が整理して提示し、それについて議論することが中心になっている。

授業動画は内部評価 (Internal assessment) の中間報告を生徒が行い、議論をしながら生徒の疑問や不安を解決していく内容になる。動画の中で報告をしている生徒は「満州事変」をテーマに内部評価 (Internal assessment) を執筆しようとしており、その際「正しさとは何か?」というテーマが議論になった。「正しい」とは何をもってそう判断するのか、「正しい」は立場

によって違うのでは、などの議論が生まれた。

こうした DP 歴史での議論は、「正しい知識とは何なのか」、「どのようにして正しいと判断するのか」など TOK(知の理論)で取り上げるようなテーマと関連している。

5 年生（高 1）段階で、DP 歴史での内容が TOK(知の理論)とどう繋がっているのか、またはその逆がどう関連しているか意識出来ている生徒は多くない。しかし、今回の議論は生徒側から自然に出てきたものであり、意識せずとも TOK（知の理論）との関連が図られた。

## 数学

DP 数学は一昨年 9 月から新しい Guide がスタートし、本校では昨年 4 月から Mathematics Applications and interpretation SL を開講している。この科目は学習指導要領の科目とは一線を介し、とてもユニークな内容で構成されている。例えば、モデリング、サンプリングの手法、仮説検定、ボロノイ図、ローンと年金についてなど、現行の高等学校の科目には入っていない単元をいくつか含む。

すべての単元を指導するにあたって、各単元の中の、さらに節ごとに日常生活や社会事象の文脈に基づいた探究課題をなるべく設定し、学習をすすめるよう指導計画を立て、教材研究を行い、日々実践している。特に探究課題は生徒自身の身近な生活の中にもあるような、また科学的な事象にも目を向けた問題解決場面を設定し、その問題解決のために関数グラフ電卓を中心とした ICT ルールもほぼ毎回利用させている。この科目名のとおり、数学を活用する場面が多く、文脈化された指導の実践を頻繁に行っているほうではないかと考える。

今回の研究において、“文脈化された指導による学びの転移”をテーマにしているが、改めて数学における学びの転移の場面を考えてみた。例えば、学んだ数学そのものが他の科目や他の分野で直接活用されることもあれば、数学の“概念”が転移・応用されることも大いにあると考える。特に高校の数学では、広く一般的には後者のほうが多いのではないかと考えている。そこである数学の概念が他の科目や他の分野に転移することが期待できる学習内容に注目し、6 年生が 9 月に学習するボロノイ図に焦点を当てた。

ボロノイ図とは、平面上に設定されたいくつかの点（母点）に対して、この平面上のその他の点は、どの母点にもっとも近いかを平面を分割することで示す図（図 1 参照）のことをいう。

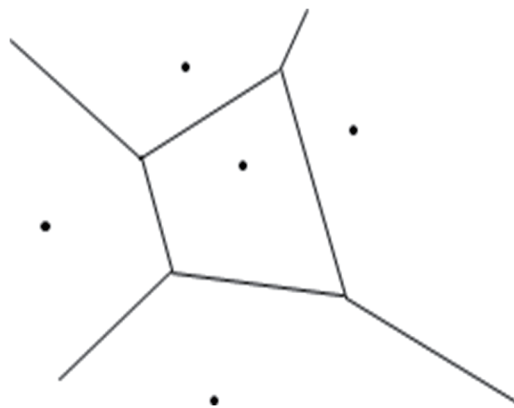


図 1 ボロノイ図の例

このボロノイ図はその特徴から様々な分野での活用が考えられる。例えば、新たに電波の基地局をどこに作ればよいか計画するときや、動物などの勢力範囲を図で示すなどである。

今回、探究課題に選んだものは、あるサッカーチームにおける試合時の選手たちの守備または攻撃の効果的なエリア分割図の作成である。この単元「ボロノイ図」での学習目標は主に、ボロノイ図を理解し活用できること、座標平面上でボロノイ図を作成できることであるが、この探究課題でサッカーチームの選手の守備または攻撃の効果的なエリア分割図を考えるとという文脈を通して、ボロノイ図を他教科・他分野へ応用できることに気づき、考えることで、転移のきっかけとなってくれば、“TOKの種をまいた”，といえないかと期待した。ちなみにこの学年は中学2年生の垂直二等分線の作図の学習で、探究課題“AEDマップを作るには？”を題材にボロノイ図の内容を初等幾何の範囲で学習している。ただDP6年生16名のうち、2年時に在籍していたのは10名で、しかもその時から4年ほど経っていることと、6年生では初等幾何から座標平面に発展していることから学習内容が生徒全体にとってはあまり重複しないと考えた。

最後に。この学習を通して学びの転移が起こったかどうかを学習の中で確認するために、単元の学習の途中で（座標平面上でのボロノイ図に入る前に）、簡単ではあるが、“TOKリンク”と題して、“ボロノイ図はどのようなことに応用できるか？できるだけリストアップしてみよう！”という問いを投げかけた。その問いに対してグループで考えている様子とその結果を動画の最後のほうにあげたので、見ていただけたら幸いである。

## 美術

DPを指導する教師が「指導の方法(ATT)」について振り返りをする際、いくつかの質問に答えるような形式をとっている。ここでは「文脈化された指導」に関する質問の一部を以下に挙げてみる。(ATT振り返りツールより抜粋)

- ・「生徒自身の個人的な体験やバックグラウンドを学習につなげるよう促しましたか？」
- ・「多様な文化に対する理解を高める機会を設けましたか？」
- ・「開発、紛争、権利、環境など現代のグローバルな問題について探究しましたか？」
- ・「問題や考えを多角的な視点から見てみるように生徒を促しましたか？」

DP美術のコアシラバスの領域の1つには「文脈に沿った美術」がある。生徒はこの領域について、理論的実践・作品制作の実践・キュレーションの実践による探究を通して研究していくが、関連する活動として「芸術家の作品を異なる文化的文脈から考察し比較」することや「自身および他者の作品に影響を与えている文脈について検討」することが挙げられている。美術ではこういった活動を教師が指導する必要があることから、ATTの振り返りで示されるような指導の視点は美術の教科指導には特に深く関係していると感じられる。

本校のDP美術はノウルズ講師と筆者(嶽)のTTで指導をしている。本研究会で公開した授業動画では、「Art in Society and in the Environment」というトピックで、DP1年生の生徒が現代の社会や環境と自分との関わりや芸術との関わりについて、鑑賞や表現を通じて模索している様子が映されている。なお、このDP1年生の生徒達は入学から昨年度までMYP生としてIB教育を受けている。そこで、指導においては、生徒のリサーチやアイデアスケッチの段階で「グローバルな文脈(Global Contexts)」における「個人的表現と文化的表現(Personal and cultural expression)」や「アイデンティティと関係性(Identities and relationships)」を示し

て振り返らせることで、生徒自身の現時点での探究の重きが「個人的な体験やバックグラウンド」「現代のグローバルな問題」「個人的な表現」「文化的な表現」といった視点のどこに置かれているのかを再認識させ、偏った視点からのみの探究となっていないかを振り返らせながら学習を進めることを手立ての一つとして試みた。また、TOK リンクとして「How is art used to affect the beliefs of individuals and communities?」という問いを提示しており、今後探究を通じて議論させたいと考えている。

### English A: Language and Literature

This course is a native-level study of English language and literature. Our language section examines a wide range of text types, from articles and reviews, to poems and speeches, to advertisements and comics. In addition, we study 6 literary texts, including the play *The Merchant of Venice* by Shakespeare.

In this lesson, we are approaching this play as a work of art (Area of Knowledge: Arts) looking at the Areas of Exploration readers, writers, texts. In the recorded segment, we are focusing on the first area: writers (authors). We are separating "author" into its various layers and asking the following questions.

- Who are the authors of a play?
- How can we distinguish the intent in the various layers of authors?

In answer to these questions, we are examining how the original playwright together with the director, actors, and other contributors to a particular performance are all involved in shaping the meaning of the play, infusing it with varying and sometimes conflicting intent.

### English B 5年

「外国語」としての英語を学ぶ教科における TOK リンクは、主にコミュニケーションとはなにか、コミュニケーションを通してどのように知識の生成するか、という問いに収斂していく。公開した今回の映像は授業のテーマを TOK の知るための方法に関連付けていくプロセスを記録した。ここでは生徒との一対一の対話を映している。5年生（高校2年生）の2学期初めで、まだディスカッションというより、教員と生徒の対話の中で、生徒の話や関心を掬い取りながら、テーマが私たちの社会における知識の受け取り方とどのように関係するのかを生徒と掘り下げるさまを録画した。

録画した授業風景は English B の指定テーマの一つ、“Identity (アイデンティティ)”を扱った一幕である。まず授業は「アイデンティティとは何か?」という問いに関するブレインストーミングから始まる。その中でアイデンティティの構成要素の一つとして文化が挙げられた。その後エドワード・T・ホールの文化を目に視覚的に見える文化とそうでない文化のある、氷山のたとえを紹介した。

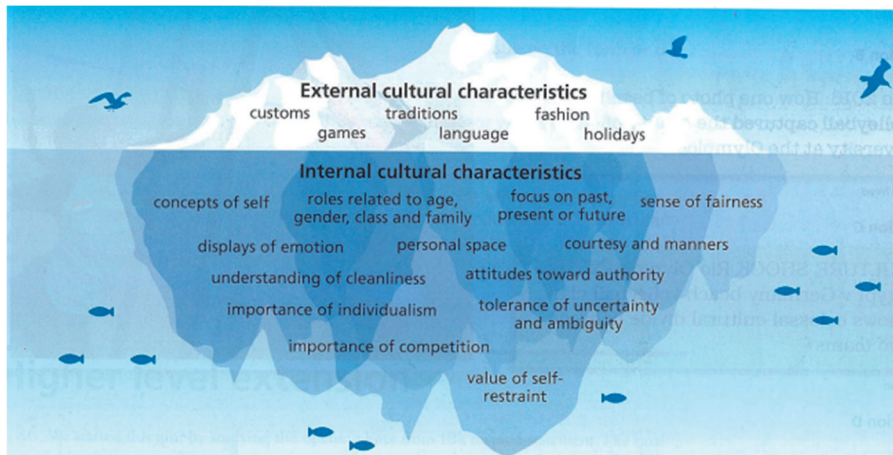


図2 エドワード・ホルの「文化の冰山」(Philpot 2018,13)

このような「見えない文化」について言及した後、教科書のアクティビティを行った。

2016年のオリンピックの際に話題になったビーチバレーの選手のユニフォームが出身国によって違った様子をメディアは様々な見出しをつけて報じた。この見出しを題材に筆者の意図や受け手の印象、言葉の選び方の違いなどについて考える活動を行った。映像の会話はその活動の後に行ったものである。見出しの中には文化の違いを「衝突」ととらえ、分断を促すような論調のものもあった。

図3 生徒がジャムボード上に見出しを整理したワークシート (Philpot 2018,14) より改変、(Dhaka Tribune 2016.August 9)

そこで教員はビーチバレー選手の服装のような視覚的な差異に注目したニュースに触れ、生徒に「私たちはどのように視覚による違いを乗り越えていけるのか」を問いかけている。その問いかけに対して生徒はまず人を作る要素は視覚的要素のみでなく家族（とのつながり）や経験によるものと認識することから始まる、と伝えようとする。が、英語ではなかなか伝えきれず一部日本語で話してしまう。その後教員は生徒の意見を英語に直しつつ、さらにどうする

と私たちは視覚情報にとらわれずに人を見ることができるのかと問う。それに対して生徒は「多様な人と交流（コミュニケーション）すること」が大切だと言う。DP English では最終試験の口頭試問でテーマに関して自分の理解を英語で伝えなければいけない。そのために教員は問いや生徒の答えを何度も違う言葉で伝えるようにしている。時には日本語でしか伝えられないことを教員が様々な言い方で提示し、スパイラル状に会話が進行する。

テーマに関して深い理解を促すためには TOK の考え方やフレームワークは有効である。English B の中心的な探究命題は「どのように私たちはコミュニケーションを行うか」ということであるが、ここでは私たちの社会がとかく視覚情報に偏った社会であることに触れて、それではどのようなコミュニケーションをはかったらいいのかという English B のテーマに触れている。

## English B 6年

“Is Global Warming Real?”この問いは Sharing the Planet というテーマの「地球温暖化」というトピックに関する問いである。生徒はこの題で書かれた記事(Lamb,2010)を読み、懐疑的な友人を説得しなければいけない。しかし、文脈化された指導をしていくときに、TOK へのつながりが欠かせない。一見「問う」ことそのものが TOK につながりそうだと感じるかもしれない。しかし、トピックを問うてだけでなく、もう一步踏み込んだ TOK の問いをすることによって、生徒の学びの転移へとつながっていくのである。知識の体系を考える TOK もあるが、この場合は「知る人」としての方法がどのようなものか、という個人の考えの部分の問いである。

- a. Why might a person be skeptical about something? 「なぜ人は懐疑的になるのか。」
- b. How can a person be persuaded? 「どうやって人は説得されるのだろうか。」

これらの問いで、どのような要素をもって人が情報を信じるのか、人は他者からの情報に対してどのように信憑性を判断していくのか、考えるきっかけを投げかけるのである。

ATT の一つとして、「ある問題や考えが併せもつ複雑さや不確かさについて目を向けるように生徒を促しましたか」というものがある。これらの TOK に関する問いを深めていくことで、より一層私たちがなぜ知るのか、それを複雑に、けれども論理的に捉えることができるようになる。そのために教師が「種まき」を地道に普段から行わなければならない。

English B では5つのテーマの内容、概念理解、言語運用のスキル、文脈理解など、授業では、意味のある内容を、目的に沿った言語で適切な表現を用いてコミュニケーションをしていかななくてはならない。概念そのものや文脈を理解する際に用いるのが TOK との繋がりそのものである。

生徒たちはこれらの問いに対して「より強く持っている信念」、「事実や統計・データ」、「宗教」、「情報源」がキーワードになるという話をあげた。特に情報源については、人であればその人との関係性や信憑性、権力や知名度によって左右されることが挙げられた。また、メディアであればそれが総合的に信頼に値するのを見極めることが大事だという話が出た。また、知る人としては「知覚」の重要性に触れ、地球温暖化は直接的に知覚していないから現実味が出ない、という意見も出た。6年生で日頃の種まきの成果もあってかスムーズに意見を出す姿



が見られた。

生徒はこの後これらの要素を踏まえながら、どのようなデータを示すのか、どのような関係性である相手としてスピーチを作るのか、知覚的に説得する方法はどんなものなのか、概念を考えた上で実際のタスクに取り組むのである。

スピーチのテクニックなど入れながら英語のスキルを伸ばしつつ、根本にある「知る人」との特性を踏まえた上で「説得」とは何かをまず考え、それを生かしてスピーチを実施できるようになる。このように学びの転移が起こる場面を意識的に教員が ATT の一環として作っていくことにより、教科と教科を繋ぎ、ホリスティックな学びとしての理解へとつながっていくのである。

#### 4. 生徒の捉えた「学びの転移」

最終試験を終えた生徒に、「学びの転移」についてアンケートを行った。その概要を抜粋して提示しておく。

**問 DPの学習の間で、「学びの転移」にあたる経験はどれぐらいありましたか。(総数 16 名)**

よくあった。6人　ときどきあった。8人　たまにあった。1人　あまりなかった。1人

**問 異なる教科間でどのような学びの転移がありましたか。(複数回答可)**

この問いについては多くの回答が寄せられ、内容的に重複するものもあるので、集計者の方で知識ベースの転移・技能ベースの転移・概念ベースの転移の三つに分類・整理して提示する。なお、何から何に転移したかを→で示したが、→を使わない方が転移の関係がわかりやすい回答については、→を使うことは避けた。「転移」という言葉について、生徒なりの理解をもとに、それぞれの生徒が様々な局面において「転移」を見出していることがわかる。

##### 知識ベースの転移

歴史で学んだ知識→英語の小説や日本語の小説の理解

##### 技能ベースの転移

数学で習った微分積分の範囲→化学のデータの分析

国語 登場人物の立場になるように様々な視点を意識→歴史上の人物の視点から出来事をみる

文学 象徴を色々な意味で使ったり象徴を他の場面でも使う→視覚芸術の展示に応用

E E 分析スキルと分析的に書く力→日本語の Paper1 や HLEssay を書くことに役立つ

歴史 資料の内容の理解と他の知識と関連さするプロセス→日本語・英語での内容の理解とその意味を探るプロセス

##### 概念ベースの転移

・自分の学習している事柄→実社会における事象がどう関わっているのか

・数学の IA では、授業内で学習した範囲と身の回りの出来事を結びつけて研究する必要がある  
あった

- ・日本語・英語の IO では文学作品と実社会の問題を絡めて話すことが要求された。
- ・TOK で学んだことは、かなり多くの教科に応用できた。
- ・化学が歴史をどう変えたかを分析する課題→歴史の学習のように、化学的な発見がどのような影響をもたらしたのかを分析した
- ・英語 テキストにおいて描かれていることの表面的な意味とそれを描く意味を分析→歴史風刺画において描かれているシンボリズムや示唆されている内容を分析
- ・歴史 原因と結果という概念について学びました。→この概念は化学を理解するときにも役に立ちました。
- ・TOK で学んだ批判的思考→日本語や英語の Paper 1 を書くときに役に立ちました。

## 5. 協議会について

### 概要

- ・参加人数 slido 解答者 62 名 DP 協議会参加者約 80 名
- ・流れ 13:00～挨拶、協議会の進め方と slido 利用法の説明  
13:05～TOKとは何か、本校でのTOKを活用した文脈化された指導についての概要説明  
13:20～各教科より公開授業動画についての具体的な説明  
13:55～転移についての生徒アンケートを基に考察  
14:05～参加者の方々と slido で学びの転移を起こすための意見交換  
14:20 閉会

### 協議会での反応

協議会では、「slido」というプラットフォームを用いた。「slido」とはリアルタイムでアンケートをしたり、参加者が質問を投稿したりできるものである。「Google slide」や「PowerPoint」などとも統合して使用できる。

今回は、「slido」を活用して3つのアンケートを行った。以下が質問項目である。

- ・「DP とのかかわりは？」 Multiple choice (Multiple answers) Votes : 60
- ・「「学びの転移を起こせそう！」と思う教科/科目の組み合わせを教えてください。」  
Word cloud poll Votes : 60
- ・「協議会を終えて、今後学びの転移を意識した授業設計を取り入れたいと思いますか？」  
Rating poll Votes : 62

協議会のはじまりで、まず「DP とのかかわりは？」という質問を行った。その結果が図1である。「DPに興味がある」と回答した参加者が45名と最も多かった。

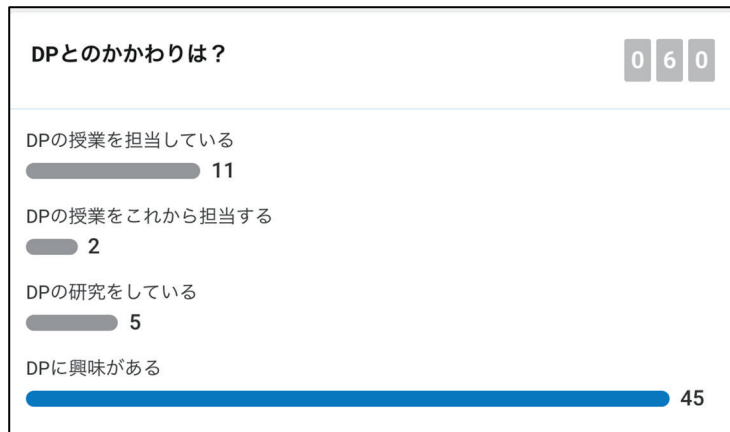


図 4

協議会の終盤では、協議会での内容を踏まえて、「学びの転移を起こせそう！」と思う教科／科目の組み合わせを教えてください。」という質問を行った。その結果が図5である。

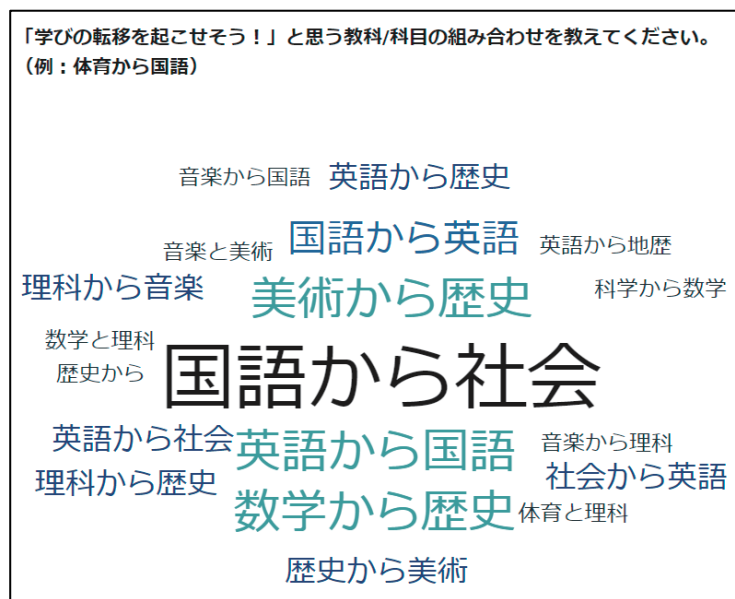


図 5

「国語から社会」という組み合わせが最も多い。国語で文学作品を扱い際に、社会の歴史で学習した内容が応用されたり、またはその逆もあったりなどする例があるようだ。また、「英語から国語」など言語を扱う教科の組み合わせでの「転移」という回答も多く見られた。全体的に見て、「社会」特に「歴史」を活用した「転移」が多く想定されたのが特徴的である。加えて、文系科目同士の「転移」や理系科目同士の「転移」が多く見られるなかで、「数学から歴史」という組み合わせで学びの「転移」が起きるのではないかという回答も多くあった。

協議会の最後に「協議会を終えて、今後学びの転移を意識した授業設計を取り入れたいと思いますか？」という質問を行った。その結果が図6である。

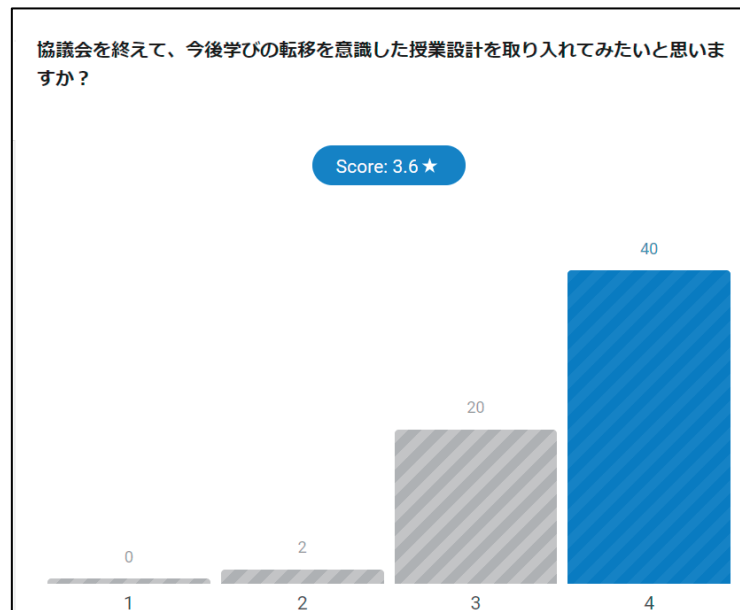


図 6

4段階で評価していただき最高の「4」とした参加者が40名いた。協議会を経て、学びの「転移」を意識した授業設計したいと考えた参加者が多くいたことから、協議会が一定、有意義なものであったといえるのではないだろうか。

### 事後アンケートより

授業研究会の事後アンケートへ、DPの授業と研究取組に関して以下のご意見をいただいた。

#### ①＜研究テーマに関すること＞

- ・「文脈」や「転移」という観点から理解することができた。5, 6年の2年間で「種まき」から「開花」まで進めるのは非常に難しいと感じたが、MYP 経ているというのが大きな意味を持つのではないかと感じた。その点、DPのみの高等学校ではさらに難しいのではないかと感じる。
- ・根源的な内容や既成価値観を揺さぶるような授業は、生徒の実態や前提知識などを把握し、水準を保つ必要があると思う。
- ・「学びの転移」に関して、「変化しないもの」から「変化するもの」を考えるという発想を得たことによって、現在のコロナ禍における「変化する状況」に対して、どう対応していくべきか考える材料を得ることができた。

#### ②＜ディスカッションを行う授業スタイルに関して＞

- ・意見を持つこと、その「論理性」と「批判性」、そして「議論」の能力が磨かれているように感じた。
- ・扱うテーマは難易度ゆえに、よほどの好奇心がないと議論できない類だと感じた。生徒はDPのスタイルを理解して選択しているので、言い換えれば、万人にとってできることではないように感じた。

#### ③＜教員の協働に関して＞

- ・協議会の最後に「TOKを理解することが容易ではないのは間違いない」とおっしゃって

いたことが印象的だった。概念理解による指導に慣れていらっしゃる IB の先生方にとっても難しいことだからこそ、御校の月 1 回の DP の打ち合わせのように、忙しい中でも教科を超えて、TOK リンクや重要概念などについて共有する場を持つことが大切だと感じた。

④<本研究グループに望まれること>

- ・ TOK が各教科の領域でどのように活用されているのか、もっと具体例がわかるとありがたい。
- ・ 一般でも閲覧できる TOK リンクに関する情報源や書籍があったら紹介していただきたい。

## 6. おわりに

それぞれの授業担当者が TOK を意識して実践している。しかし、今まではプログラム全体として共有する機会が少なかった。この研究会を通して、DP の担当者が教科を超えてそれぞれの実践でどのように具体的に TOK の種をまいているのかをお互いに見る良い機会となった。

また、生徒アンケートを実施したことで生徒がどのような時にどのような学びの転移を感じているのかが明らかになってきた。こちらが思ってもいない転移を指摘したケースもあった。一方で転移の質が期待したレベルに到達していないケースもあったかもしれない。今後の課題としては、転移の質をより概念ベースで増やせるように授業の改善を行っていき、より DP の学びを深めていきたい。ここで明らかになったことは転移にフォーカスしたからこそ見えてきた成果と課題であると考え。これからも種まきを続けていきたい。また、まいた種から芽が出るのか、出た芽は何なのか見出していきたい。

## 参考文献

- Dhaka Tribune (2016 August 9). *Does this picture show a culture clash?* Dhaka Tribune.  
<https://www.dhakatribune.com/uncategorized/2016/08/09/picture-show-culture-clash>.
- International Baccalaureate Organization. (2018). *Diploma Programme Language B guide: First assessment 2020*. International Baccalaureate Organization.
- Lamb, R. (2010, June 9). *Is Global Warming Real?* Seeker.  
<https://www.seeker.com/is-global-warming-real-1765065527.html>
- Philpot, Brad. (2018). *English B for the IB Diploma Coursebook Second Edition*. Cambridge, UK. Cambridge University Press.
- Walker, G. (2010). *The Changing Face of International Education: Challenges for the IB*. Cardiff, UK. International Baccalaureate Organization.
- IBO 「DP 美術 指導の手引き 2017 年 第 1 回試験」, 2017
- コエテコ編集部 by GMO, “算数を使ってサッカーの戦術を練ろう！川崎フロンターレ主催「STEAM 教育×SOCCER」イベントレポート”, <https://coeteco.jp/articles/10490>
- 国際バカロレア機構. (2015). *ディプロマプログラムにおける「指導」と「学習」*. International Baccalaureate Organization.

## Sowing the Seeds of TOK

– Transfer of Learning through Contextualized Teaching –

### Abstract

The DP study group focused on understanding how transfer of learning happens through contextualized teaching. The group shared how Theory of Knowledge (TOK) links can be a vehicle of transfer of learning. This study reflects on the experiences of each subject areas as well as the programme as a whole.